

ケーベル先生の五周年に

橘 糸 重

先生のリード集について

先生がお亡くなりになつてから、早く五年目になります。年年思ひ出を新にして、先生をしのぶお弟子達は、東京にも地方にも多い事と存じます。私は唯自分だけの思ひ出をここに少し書かせていただきます。

先生がお遺しになつたリードの草稿を書き集め出版しようと思ひましたのは、先生がお亡くなりになつたあの悲しい日、御遺言を知つてからこのかた以来の事で、御座います。が、第一に危あやぶまれた事は私自身に其力があるかどうかと云ふ事で御座いました。それでも御遺言であるからと

いふ事を力に、一心にお筆のあとをたどりました。同年九月一日の大震災の日にとにかくそれだけを取出しはしましたが、其後長く病氣をしたりして、やうやく九曲だけ清書しましたのは大正十三年春で御座いました。詩の方は久保様、曲の方はバルダス氏に閱を願ひました。出版の事については、岩波様がこちらで出来るだけ問合せ下さいましたし、久保様は十四年三月渡歐の時、寫しを一部持つて行つて下さいました。あちらに居られる故先生の舊いお友達等の御意見や、又簡単な出版方法をきいて下さるため御座いました。お二人は色色お骨折下さいましたが、今まだ一寸時機がまゐりませんので、一

般の世に送る運びにいたりません。

今年、故先生の五周年に當ります故、簡単な體裁ながら、或僅かな部数を謄写版にして先生の御知人のうちへおわけする事といたしました。

故先生と故バルグス氏と

先生とバルグス氏とは一度も逢はれた事は御座いません、それにもかかはらずお互ひに興味を持つて居られた様で御座いました。

バルダス氏が上野の音樂學校に教へに來られる様になつてから、其教授ぶりや演奏などについて興味をもつて先生はよく色色とおききになり、或時は小品集中にかかれた音樂問題についてバルダスにはどういふ説があるかきいて見よなどと仰いました。バルダス氏の返事はいつも先生の満足される處で御座いました。

先生が終りの御病中、或時「バルダス」は、と仰つた儘黙つておしまひになつた事がありました。其時はいくらか待つてもそれきり何とも仰いませんでした。幾日かの

後、もうずい分おわるかつたのですが、不意に「スツヒンクス、スツヒンクス」と仰いました。思ひがけなく何であらうかとただお顔を見て居りましたら、又つづけ、「シューマンのカーナヴァルの」と仰つて、「バルグスはあそこを弾くかどうかといふ事を此問いはうと思つたがスツヒンクスと云ふ言葉がどうしてか口へ出て來なかつた」と仰つてお笑ひになりました。それで先日はいつまでおまちしても黙つていらした事とわかりましたが、曾^かつて先生がおききになつた人人の中であれを（スツヒンクスを）弾いたのはルビンシュタイン唯一人であつた、とも其時お話になりました。お苦しさうですのに、そんな話を色色して下さいました。

バルダス氏があそこを弾くかどうかは、この次逢ひましたらきいて見ませうと申上げたのですが、先生は其返事を待つてゐては下さいませんでした。それにさきだつてお亡くなりになりましたから。

其後、わたくしが、おぼつかなく、書きあつめた先生

の御遺稿のリード、これに目を通してもらふ人を、たれかれと考へてバルダス氏に思ひ當つたのは前申した様なわけからで御座いました。

御遺稿の校閲を頼みました時、バルダス氏は一寸不思議さうにして、「ケーベル博士といふ方について、此間から委しく知りたいと思つて居た處であるのに、さういふ事を頼まれるのは不思議の思ひがある」といはれ其方の遺稿ならば、こちらから頼んでも見せてもらひたいとも云はれました。（まえ方、先生の音楽問題など私からたづねました時は、殊更に先生のお名前を云はなかつたので御座います。）

バルダス氏が先生のお名を初めて知つたのは、前年の夏、避暑地に居た時だつたさうで御座います。それは先生のお亡くなりになつた事を報じた日本の新聞のきりぬき、ことに先生に對する追悼文の獨譯を、誰からかバルダス氏に送つたからなのださうで御座います。其追悼文の中には、先生が重い御病中にも、しきりに音楽の事を

いはれ又バルダス氏の名などいはれた事が書かれてあつたので、バルダス氏は、未知のケーベル博士について御平常の事が知りたくなつたのであるよしを云はれました。

先生の御遺稿には丁寧に目を通して下さいました。

先生の御平常については、先生の小品集を讀まれる様と申しましたら、バルダス氏も喜んでよまうとの事で御座いましたのに、同氏は再び來朝の豫定で一時歸國されや其途次、イタリーで、痛ましい不慮の死を遂げられました。

お互ひに興味を持つて居られながら、此世では一度も逢はれなかつた二人の方、今は彼世でつきぬ物語をして居られるで御座いませうか。

（日本の新聞に出た先生追悼の文とは水島浩平といふ名で書かれたそれかと存じます。先生の最後の御病床を見舞はれた眞鍋先生門下の醫學士の方のお筆とぞんじます。）

先生の日本のお住居

「船をまちつつ船宿に過ごされた様な」と安倍様の仰せられた先生晩年の横濱のお宿、即ロシア總領事館は、大正十二年九月一日の大震の折に、眞先につぶれたさうです、それをきいて身の毛もたつ様に思ひましたのは私ばかりではなかつた事とぞんじます。もしあれが先生の御病中であつたらばどうで御座いましたでせう。又御丈夫でいらしたとしても、若い副領事さんや召使ひの人さへ、外そとに出るひまもなかつたといふでは御座いませんか。恐ろしいとも何ともいひ様のない事で御座いました。

程經て私が見ましたその跡はただ一面の煉瓦のくずれで、毎日に露國國旗をかかげて居た太い柱は地上二三尺の所から、ねぢをれたままになつて居り、玄關のバルコニに小暗いまでにからんでゐた白藤はあとかたもなく、しゆろの木は、なかば焼かれて立つて居りました。

東京駿河臺の、前後二度のお住居も二つながら同じく

震災をのがれませんでした。駿河臺は火が中中はげしかつたと見え、建物はもとよりの他、お弟子達とお寫眞をおとりになつたあのお庭にも焼残りの木などは一本もないほど一面の焦土となつて居りました。

折折、猿樂町の原因さんの家へ招待されて先生はいらつしやいましたが、其時はよく駿河臺の方にある入口からお這入りになり、私達が椿御殿などと呼んで居りました椿の太木にかこまれた茶室にやすんでいらつしやいました。下の家うちからお迎へにまゐりますと、かなり急な、苔のむした、すべりさうな石段を一段一段杖をおつきになりながら、時々 *Mein Gott* などと仰りつつ、靜かに靜かに下りていらつしやいましたが、其茶室も椿も残らず灰になつて、やうやく石段だけがそこかとばかり残つて居りました。

白山のお住居は、私が見にゆきました時、夜で御座いました故か、昔のお家らしいものが見當らず、畠であつたあたりが大きくかこひこ込まれて、面影を忍ぶよしも御

座いませんでした。多分持主でもかはつたので御座いませう。ただ不思議な事には、坂の上に「おでん」とかい
た提灯が、赤赤とついて、團扇の音を、はたはたとたて
てゐる店が一軒ありました。昔先生に御あいさつをして
喜んだあのおでんやの子か孫か、あそこに住着すまいたのか
しらんなどと思ひましたが、這入つてきく勇氣は一寸御
座いませんでした。

これで先生の日本に於けるお住居は、どこも名残りな
くなつたわけで御座います。それでも先生のお弟子達の
心の中にはしつかりとたてられて居て、決して消えては
しまはないので御座いませう。今は地震にも火事にも、
何のわづらひも受けなことをひそかに喜んで居りま
す。

序ながら。「先生は結末をつけるといふ事を大切にしてい
られた」、と安倍様も云はれましたが、先生が書いていらし
た思想誌上の御文章も、お亡くなりになる其月に、其題目
については偶然にも完結して居りました。そして其時お書

きになつたあの美しく感激にみちたセラピオンの事。聖セ
ラピオンは十一月十四日が其日ださうですが、月こそ異な
れ、先生の御命日が十四日であるのも一寸不思議な心持が
いたします。

【入力者注】底本と行を合せるために、フォントサイ
ズを小さくしたり、半角スペースを挿入した箇所があり
ます。

初出・底本：岩波書店「思想」

昭和二（1927）年六月一日發行

入力：小林 徹

公開：令和六（2024）年二月十三日

橘糸重【散文作品集】に戻る。